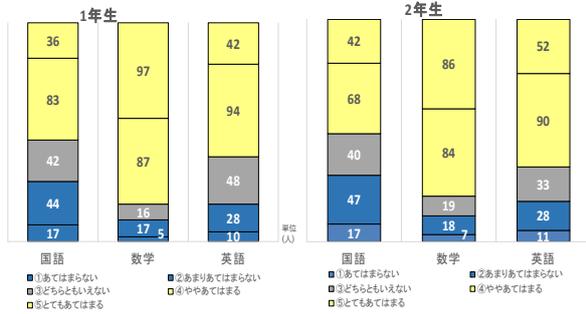


英・数・国 学習実態調査の結果報告（1学期末 実施分）

英・数・国 学習実態調査（1学期末）

国語・数学・英語の各教科について、あなたが日頃の学習で心がけていることを振り返って、最も近いものを回答してください。
Q22-24 理解できない点や疑問点は、先生や友人に質問して解決するようにしている

・協同的な学びに関わる項目
・両学年ともに数学はよい傾向にあるが、他教科への広がり、さらに深い学びへつなげていくことが求められる。



1学期末に、本校の教育課程実践モデル事業の測定評価のために、スタディーサポート（ベネッセコーポレーション）の質問項目を参考にしながら、国語・数学・英語の各教科について、生徒が日頃の学習で心がけていることなどのアンケートを作成し、調査した。その主な質問項目と簡易分析は下の通りである。

しかし、このアンケート調査の位置づけが曖昧なままの実施であった。生徒ができたこと等に関わる生徒評価と、そのための手立ての有効性等に関わる教職員評価とのズレから課題が見えてくるものだが、今後その視点で再度詳細に分析したい。

- Q22-24 理解できない点や疑問点は、先生や友人に質問して解決するようにしている 【左上の図】
協同的な学びに関わる質問項目である。両学年ともに数学はよい傾向にあるが、他教科への広がり、さらに深い学びへつなげていくことが求められることがわかった。
- Q25-27 授業では自分の意見をわかりやすく伝えるようにしている
表現力の育成に関わる項目である。概ね半数の生徒はわかりやすく伝えるよう心掛けているが、論理的に表現することができるような指導を要することがわかった。
- Q28-30 目標や目的をもって授業に取り組むようにしている
生徒の主体的学びに関わる項目である。2年生の数学・英語は比較的よい傾向にあるが、全体的に改善を要することがわかった。

奈良教育大学の赤沢隼人准教授は、カリキュラム・マネジメントに基づいて、授業・学校改善を実施する時のポイントに、①「ゆさぶる」…問題意識を喚起し、仲間を増やす ②「しぼる」…欲張らず重点化する ③「みとおす」…授業や学校の目指す姿をイメージし、共有する ことをあげておられる。そして、はじめの一步として、まず「学校、子ども、地域の実態や現状（困りごと）を証拠（エビデンス）に基づいて正しくおさえているか」、さらに「実態や現状（困りごと）」を踏まえて、「ここを何とかしたい」という課題意識を絞り込み、多くの教職員で共有する」ことが大事であるとされている（講義レジュメより）。

つまり、実態把握がないと課題は共有できないともいえる。このことは運営指導委員にも指摘された。本校の教育課程実践モデル事業では、1年次の具体的な生徒像を次のように設定している。

「生徒同士でお互いに質問し合うような力を身につけ、対話的な学びによって理解が深まり、そうした良い意見を主体的に考え、活動できる力を備えた生徒」

その設定理由は、次のような態度・力が不足しているのでは、と考えたからであった。

- 1 興味・関心をもち、主体的に学ぶ態度
- 2 基礎的・基本的な知識を身につけるとともに、正確に読解する力
- 3 根拠を考察し、自分の考えを論理的に相手に伝える力
- 4 相手の考えを聞き、質問できる力
- 5 コミュニケーション能力、自他を尊重する心

しかし、それは必ずしも正確な実態把握に基づくものではなかったことは否めない。1学期末に行ったアンケート調査の結果を、あらためて実態把握の観点で見返すことで、その点を補完したい。

教育課程＝カリキュラムではない。教育課程は学校の教育計画であるが、カリキュラムは計画だけでなく、子どもが実際に学んだことまでも含むものである。そのためカリキュラムには、学校で「計画されたカリキュラム」、教室や授業で「実施されたカリキュラム」、「学ばれたカリキュラム」という位相がある。だからこそ、生徒が本当に何を学んだかの評価が、カリキュラムマネジメントにおいては重要となる。

12月に再度同じ質問項目でアンケート調査を実施する。これを、評価することの意義について考える契機とするとともに、次年度に向けた有効な課題設定へとつなげたい。

※裏面には、10月20日の研修会の事後アンケート集計を掲載しています。
詳細は「EAST通信 第5号」をご覧ください。